

海上の道 柳田国男著

2022.06.02

1952 柳田国男(当時 77 歳)九学会連合大会講演

1. 日本人の起源をめぐる探求
稲作民族としての日本人の南方起源説。
2. 日本人の南方起源説
稲作の技術を持った中国江南地方の人々が、「子安貝」という貴重品(貝貨、殷の通貨)を求めて、海上に乗り出し、島伝いに、ついに日本列島へたどり着いたという壮大な仮説。
3. 「原郷」としての南方
太平洋戦争中、兵士として南方に赴いた人達、南方に滞在した人達などの、日本人としての原郷としての南方という幻想。
4. 騎馬民族説(民族学者 江上波夫など)の流行と根拠の弱さ。
朝鮮半島回りという理由の説得力。
5. 稲作の技術を携えて日本列島へやって来た華南の人達、3,600 年～2,600 年前。
「海民にして農民」これが日本人の原初の姿。
6. 日本列島における稲作は、朝鮮半島南部の稲作文化と多くの共通点はあるが、それよりさらに以前に起こったはずの出来事(華南の稲作の伝播)に照準を定めている。
それは、稲作技術そのものの発祥の地である揚子江下流域(河姆渡)から直接にもたらされたものと考えた。
7. 揚子江河口の浙江省「河姆渡」遺跡の発掘と大規模な水田耕作の開始、それが海岸沿いに北上して、「黄海沿岸」から、遼東半島、朝鮮半島に広がって行ったという通説。(7,000 年～5,300 年前の遺跡)
豚や水牛を飼い、水稻耕作が華南で行なわれていた。
その年代が華北の畑作農耕に匹敵するものである。
8. しかし、「黄河沿岸」よりもっと南の「東海」から、華南「河姆渡」の人たちが、子安貝(貝貨)を求めて、宮古島など、琉球列島へ渡って来たという発想、異説。

9. それに対して、沖縄諸島に中国南部から稲が伝わったことを説く様々な伝承がある。
稲作技術は、黒潮を利用して遠洋を航海した海民によって、南中国から沖縄諸島に直接もたらされ、それが島伝いに日本列島に広がって行った。
10. アイヌ民族
軽装な冬装束、夏向きの家屋構造、生活風習は南方出自を現わしており、それは、遺伝子によって沖縄に人々との関連が確認された。
11. 沖縄諸島には旧石器時代からすでに人々が住んでいた。
アイヌの人々は、島伝いに沖縄諸島にたどり着き、その後、日本列島を北上して、東北から北海道に広がって行った。
この「沖縄－アイヌ」人にその後多方向から列島に移住してきた、新石器人が混血して、いわゆる「縄文人」が形作られていった。
この縄文人形成の歴史はゆうに一万年を超えている。
12. 約 12,000 年前、日本列島は大陸から分離されて形成された。
13. 「日本人」と呼ばれる人間は、この「縄文人」と「弥生人」の混血によって生まれた。
14. 弥生人は主に南中国と朝鮮半島からの移住者であり、その移住は 2,500 年前(殷の時代)ごろから継続的に行われた。
15. 彼等南中国からの移住者は、稲作の技術を持っていた。
日本列島における本格的な稲作りは、その頃から、次第に列島に広がっている。
16. それまでの日本人は、お米も作れば、魚も取り、狩猟も行えば、商業もするという、いたって融通無碍な価値観を抱いていた。

日本史の手がかり

2022.05.31

年 代	事 柄	備 考
(日本史 文字以前)		
紀元前 200 年頃	弥生文化が各地に普及	
紀元前 210 年	徐福東渡	
紀元前 50 年頃	倭人 100 余国に分立し一部は前漢の楽浪郡と交渉を持つ	
57 年	倭奴国王 後漢に朝貢して光武帝より金印を受ける	
100 年頃	鉄器の普及 倭、朝鮮半島から鉄を盛んに輸入し始める	
147 年	倭国大和 30 年間	
220 年	魏、呉、蜀の三国時代に入る	
230 年頃	倭の諸国、邪馬台国の卑弥呼を連合の盟主とする(対、南の狗奴国)	
239 年	日本書紀では卑弥呼を神功皇后としており、(近畿説) 九州説では邪馬台国が東へ移り、「ヤマト」となったとする	
(日本史 文字記載)		
500 年代		

河姆渡遗址

中国浙江余姚新石器时代遗址

河姆渡遗址是浙江省余姚市一处公元前5000年至公元前3000年间的新石器时代文化遗址，位于余姚市河姆渡镇芦山寺村的姚江北岸^{[1][2]}。遗址发现于1973年夏，此后的两次发掘发现遗址包含4个叠压地层，揭露了干栏式建筑等遗迹，出土了夹炭黑陶等遗物和大量动植物遗存和栽培稻谷，一时轰动学术界，其代表的考古文化被命名为“河姆渡文化”。1982年，河姆渡遗址被公布为全国重点文物保护单位，2001年被《考古》杂志评为“中国20世纪100项考古大发现”之一^{[3]:3-7}。发现地建有河姆渡遗址博物馆和遗址展示区^[4]。

发现与发掘

河姆渡遗址



河姆渡遗址文保碑，碑后为第二次正式发掘地点，现为遗址还原区

全国重点文物保护单位
中华人民共和国国务院公布

所在	浙江省余姚市
分类	古遗址
时代	新石器时代
编号	2-0049-1-004
登录	1982年



河姆渡遗址第一次正式发掘区域，现

河姆渡遗址发现于1973年夏。当年6月，罗江公社^[注 1]为改善地势低洼稻田的产量，开始在河姆渡村北侧建造机电翻水站。当水闸基坑挖掘至3米深时，发现一批黑陶片、木建筑构件和动物遗骸。罗江公社随即将工程暂停并将此消息上报。浙江省文化局派出的专家王士伦在考察后当即建议浙江省博物馆对遗址进行抢救性发掘。随后，浙江省博物馆派出的考古队对遗址进行了调查和试掘，在5米见方的探方中共清理出100余件文物，以骨器和陶器为主^[5]。经过调查发现，遗址分布范围达到40000平方米，其年代、文化堆积丰富度和分布范围都超过了当时浙江省已经发掘的考古遗址^[6]，且发现的典型器物器型均有别于长江下游其他新石器时代文化^{[3]:4-5}。

1973年11月4日，经过国家文物局批准，浙江省文物管理委员会、浙江省博物馆偕同宁波、余姚等地文物部门人员组成考古队，开始对河姆渡遗址进行第一次正式发掘。该次发掘至次年1月10日结束，共打开探方810平方米，其中有文化层的面积为600平方米，其余部分因被姚江冲刷而消失。发掘探明，河姆渡遗址由四个史前文化层组成，出土文物1645件，包含石器、陶器、骨器、木器等类别^[7]。遗址发掘出稻谷等禾本科植物堆积厚达40至50厘米^[8]，大量人工栽培稻谷的出土轰动了学术界。1976年召开的发掘工作座谈会上，不少学者提出，河姆渡遗址3、4层代表了一种全新的考古文化，即后来所称的河姆渡文化^{[3]:6}。

为了进一步厘清河姆渡遗址的文化内涵，克服第一次正式发掘面积过小导致的考古资料缺乏问题，1977年，国家文物局拨专款，对河姆渡遗址进行了第二轮大规模发掘。参与此次发掘的除了浙江省级文物考古机构和宁波、余姚的文物机构外，还有来自杭州、温州、湖州、嘉兴、绍兴、衢州、丽水等省内多个地区的考古工作者。来自中国科学院考古研究所的考古学家杨鸿勋、苏秉琦以及北京大学教授严文明亲抵发掘现场指导发掘^[6]。这次发掘共打开探方20个，发掘面积2000平方米，发现大片木构建筑遗迹，墓葬27座，灰坑29个，出土各类文物6197件，进一步丰富了研究者对遗址内涵的认识^[9]。

分期与年代



河姆渡遗址博物馆中的各期陶器展示，最下为第一期，最上为第四期

河姆渡遗址的堆积厚度为4米左右，共分为4个土质区分明显的地层，均为新石器时代堆积。第二次发掘时又将第二、三、四层根据土质和土色区分为2A、2B、3A、3B、3C以及4A和4B层。两次发掘的地层堆积情况基本相同，分别对应遗址文化的一到四期^{[3]:8,13}。四个时期的建筑和葬制相似，出土器物器型基本相同且存在完整的演变轨迹，因而被认为属于同一个考古学文化，即河姆渡文化^{[3]:364}。

第一期遗址保存最为完好。考古发现原始聚落遗迹包含西北—东南向排列的木桩，横向的地灶及散落的其他构件，应为干栏式建筑遗迹。建筑遗迹中发现大量栽培稻谷。遗物中发现数量最多的器物为骨器，此外还有木器、石器和陶器。骨器中有骨耜、骨镰、骨锥、骨针等，骨耜为其中的典型器物。石器以斧、锛为主，打制石器的数量大于磨制石器，通体磨光的石器及钻孔石器较为罕见。也有璜、管、珠、玦、玛瑙等饰品出土。木器多为器柄、木棍等，也有蝶形器等装饰品。日常用品中的陶器器型主要是釜、罐、盘、钵，多为黑陶，只有极少一部分彩陶，大部分为夹碳陶，少部分为夹砂陶，烧制温度大约为850摄氏度，主要制作方法为泥条盘筑法，也有采用捏塑和敷贴的器物，口沿多有装饰花纹，部分容器上有动植物纹样^{[3]:361-362}。

第二期遗址也发现了残存木桩。这些木桩经过加工，因而较为整齐。部分木桩底部发现了作为柱础的木板，说明栽埋柱的方式已开始替代之前直接栽桩的方式。该期发现墓葬13座，分布于居住区，葬式为头东脚西的侧身屈肢葬，面向北方。出土文物的数量较第一期有减少，风格在沿袭的基础上有所变化。石器中的打制痕迹明显减少，而磨制石器大量增加。装饰品多采用萤石制成。骨器的种类和形式与第一期相同。木器中出现了木耜和木胎漆碗。陶器的黑色变浅，夹砂陶数量上升，泥质红陶开始出现。器型中，圈足器比例增加，灶和甑开始出现^{[3]:362-363}。

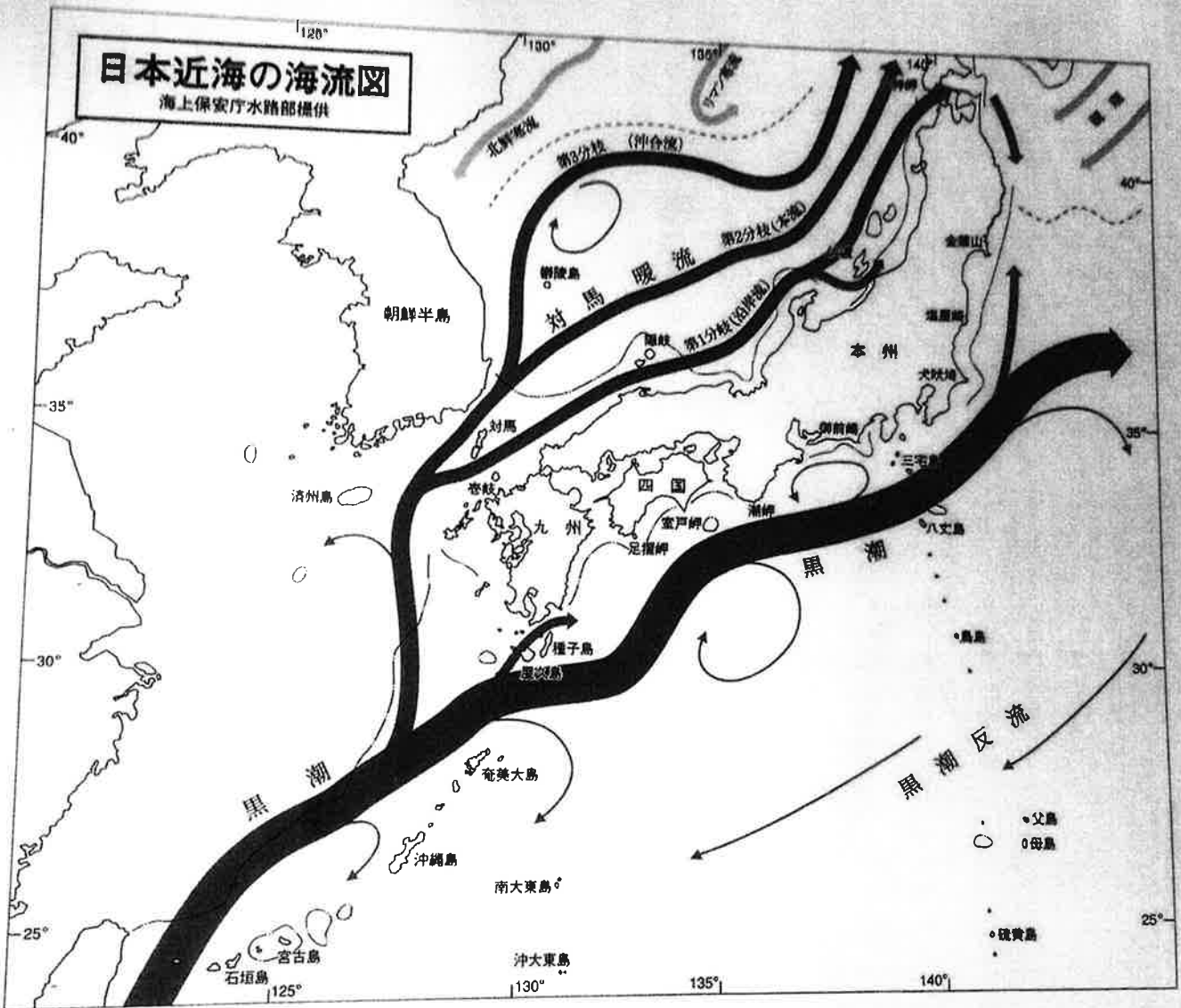
第三期遗址仅有零星柱洞，疑聚落中心尚未发现。发现方形木结构水井遗迹一眼，周边遗迹暗示可能有井亭存在。此外还发现墓葬三座，葬制与二期相同。出土遗物少于第二期，其中骨、木器数量锐减。石器大多已通体磨光且采用钻孔技术。出土陶器中，夹砂灰陶、夹砂红陶最多，而夹碳陶仍占据一定比例。制陶方式除手动外，还发

子安貝(貝貨)のこと

1. 3,000年以上の昔、金属貨幣の無い時代に、貨幣として使用されたと考えられる。
その当時の価値は、王朝(殷王朝、周王朝)の財貨(国家財政資金)であり、莫大な額にのぼるものであったと考えられる。
2. その財貨の原産地が、東夷と称せされ、具体的には、子安貝の主要産地である琉球列島の宮古島にあったと考えられる。
3. 3,600年～3,000年の昔、殷の王朝の求めに応じて、ゴールドラッシュのような現象の中で、主として江南の地の人々が、宮古島を中心とした琉球列島へ来島したことは確かと思える。
4. それから1,000年前後の後、銅貨が使われだし、寶貝の需要がさほどまで貴重でなくなった頃、貝の採取に来ていた人々とその子孫は、現地へ持ち込んだ稲の実を小規模に栽培していたが、宮古島等の島では効率が悪く、広い土地を求めて北上を始めたと思われる。
北上の終点は九州である。

日本近海の海流図

海上保安庁水路部提供



港川人

約20000年前に沖縄県に存在していたとされる人類

港川人（みなとがわじん、Minatogawa people）は、約20000～22000年前に日本の沖縄県に存在していたとされている人類^{[1][2]}。

概要



港川人（港川1号）の化石（レプリカ）。国立科学博物館の展示。

1967年^[3]から1970年頃^[4]、アマチュア考古学研究家の大山盛保により、沖縄県島尻郡具志頭村港川（現在の八重瀬町字長毛）の海岸に近い石切場で骨が発見され、東京大学の鈴木尚により確認された（港川フィッシャー遺跡）。

身長は男性で約153～155cm^[5]、女性は144cmと小柄で、筋肉質のしっかりとした体型ではあったようだが肩や腕の力は弱く、握力と咀嚼力は強かったことが骨から読み取れるという^[6]。

この人骨は、石垣島の白保竿根田原洞穴遺跡で約2万7千年前の人骨が発見される^{[7][8]}まで、全身骨格の形で残っている日本の人骨の中で最も古いものであった^[1]。

縄文人との関係

かつて港川人は縄文人の祖先ではないかと考えられてきた^[9]が、2009年の研究で、港川人を縄文人の祖先とする考えに疑問を投げかけるような分析結果が出ている^[10]。港川人は現在の人類ならば、オーストラリア先住民やニューギニアの集団に近いのではないかという説である。国立科学博物館の海部陽介研究主幹によると、港川人は本土の縄文人とは異なる集団だった可能性がある。つまり、港川人は5万~1万年前の東南アジアやオーストラリアに広く分布していた集団から由来したことになる。その後に、農耕文化を持った人たちが東南アジアに広がり、港川人のような集団はオーストラリアなどに限定されたのではないかと述べられている^{[3][4]}。

展示

沖縄県立博物館・美術館には「港川人復元像」が所蔵されている。また、八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館には、常設展示の1つとして港川人コーナーがあり、全身骨格のレプリカやこれまでの研究成果が紹介されている。

沖縄の古代人骨

沖縄の古代人骨としては、1968年に沖縄県那覇市山下町の山下町第一洞穴遺跡から発見された約3万2000年前の旧石器時代の化石人骨（山下洞人）が知られている。また、2014年には港川と近距離の沖縄県南城市のサキタリ洞遺跡で少なくとも9000年以上前の人骨が発掘され、調査が進められている^[1]。

また、石垣市の白保竿根田原洞穴遺跡から発見された数体の全身骨格のうちのひとつについて、沖縄県教育委員会は2017年に港川人より5千年古い約2万7千年前のものであると発表している^{[7][8]}。

遺伝子

港川人1号はハプログループM (mtDNA)の基盤的な系統に位置していることが明らかになった^[11]。

ピンザアブ洞人

ピンザアブ洞人（ピンザアブどうじん）又はピンザアブ人（ピンザアブじん）は、1979年（昭和54年）に沖縄県宮古島市（発見当時は宮古郡上野村）のピンザアブと呼ばれる洞穴で発見された約25,800 - 26,800年前（旧石器時代）の化石人骨^{[1][2]}。

概要

発見地のピンザアブは沖縄県宮古島市（宮古島）上野豊原にある。宮古方言で「ピンザ」は「ヤギ」、「アブ」は「洞穴」を意味し、「ピンザアブ」は「ヤギの洞穴」という意味である^{[3][4]}。

1974年（昭和49年）に愛媛大学による探査が行われ、ピンザアブの洞穴としての規模は判明していた。一方で沖縄県内では農業基盤の整備が進むとともに、各島嶼に分布する石灰岩洞穴の消滅と保存の問題が生じたため、沖縄県教育委員会は1977年（昭和52年）から3か年にわたる「沖縄県洞穴実態調査」に乗り出した。その一環として1979年（昭和54年）8月下旬にピンザアブの調査が行われ、大城逸朗（沖縄県立博物館）、新垣義夫（普天満宮）らによって多数の化石動物骨とともにヒトの後頭骨片が発見された。

1980年（昭和55年）、横浜国立大学の長谷川善和は後頭骨片、尖頂骨、右側頭頂骨、脊椎骨（第5腰椎）、乳歯（下右乳犬歯）片を追加発見した。長谷川が人骨の鑑定を国立科学博物館の佐倉朔に依頼したところ、この人骨に港川人と共通する特徴があることがわかった。

この知らせを受け、沖縄県教育委員会は、文化庁の補助・指導と地元の上野村教育委員会の協力を得て、地質学・古生物学・人類学・考古学の専門家チームを組織し、3年間におよぶ「ピンザアブ洞穴発掘調査」を実施した。この調査でさらに人骨が発見され、年代測定も行われた。

ピンザアブ洞人の年代は約25,800 - 26,800年前と判明した。これは年代的に山下洞人（約32,000年前）と港川人（約18,000年前）の中間に位置し、白保竿根田原洞穴遺跡で出土した全身骨格（約27,000年前）とほぼ同年代である。また、形態分析からも港川人に連続するが、やや先行する様相を示していた。骨は壮年の男女と子供を含む数個体を含んでいた。旧石器時代の人骨であるが、その生活の痕跡は発見されなかった。

1981年（昭和56年）、ピンザアブ遺跡は上野村（現・宮古島市）の史跡に指定され

貝塚時代最古の人骨

1万〜9千年前

【うるま】うるま市教育委員会は8日、貝塚時代としては沖縄最古となる、約1万9千年前の人骨が市与那城屋慶名の藪地島にある藪地洞穴遺跡で出土したと発表した。市文化財課の横尾昌樹主任主事は「これまで分からなかった、旧石器人と貝塚人の間の『空白の時代』に見つかった初の人骨で、貴重な資料。二つの時代をつなぐ手掛かりになる」と期待した。(22面に関連)

うるま 藪地洞穴遺跡

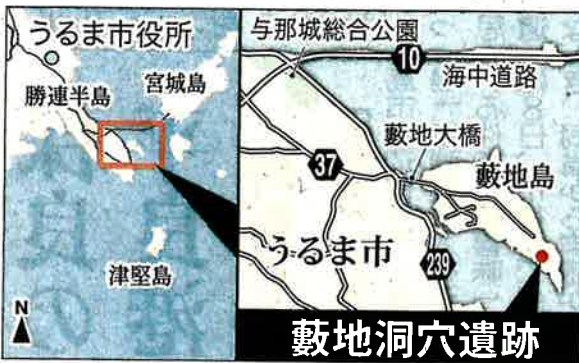
発見された人骨は、2014〜16年度に実施した調査で発掘された。複数の特徴から、10代後半から30代の比較的若い女性の前頭骨の一部とみられる。見つかったのは洞穴奥の地表から約60センチ下の粘土質の地層で、上下の地層の年代から約1万〜9千年前のもの

発見された「最古の貝塚人」の人骨
8日、うるま市勝連南風原・あまわりパーク



と推定される。県内では港川遺跡やサキタリ洞遺跡から、約2万3千〜1万4千年前の旧石器人の骨

旧石器との空白つなぐ



のほか、約7千年前以降の貝塚人の骨は発見されていた。その間の約7千年に生きていた人骨が見つかっておらず「空白の時代」となっていた。市文化財課によると発掘時は石灰に包まれた状態で、石

灰岩として保管されていた。今年に入り専門家から人骨の可能性があると指摘を受け、9月に石灰を除去する作業をすると、人骨が見つかったという。

人骨は9〜21日まで市勝連のあまわりパーク歴史文化施設内で、23日〜12月5日は県立博物館で展示する。その後、12月14日〜1月30日まで再び歴史文化施設内で展示する予定。

【ことば】旧石器・貝塚時代 沖縄での文化的な時代区分の一つ。石器使用の有無が大きな違いで、旧石器時代は石器の使用が確認されていない約1万4千年以前を指す。対して、貝塚時代は主に石器の使用が見られる時代を指す。

海上の道

要約(2022.5.29)

史記に徐市(徐福)のことが書かれており、徐福が存在したことは事実である。

また、徐福が仙薬を求めて数千人の童男童女と共に、仙人を求めて海に漕ぎ出したのも事実であると思われる。

しかし、日本に徐福が渡来したというのは、上記の記録を読んだから後に後世の人々が考え出したものであるから、当てにはならない。ともかくも、中国本国においては、徐福は永遠に行方知らずであり、この遠征によって、彼我の交通が開けたことにはなっていないのだ。(柳田国男 海上の道 要約 1875~1962(87歳))

1. 日本と沖縄を連ねる交通路

東海岸ルート 日本とのルート 日本語、勝連(大和の鎌倉のごとし)
(農耕民族)

西海岸ルート 首里、那覇地方 荒い海(関門海峡)
(騎馬民族)

神武の東征 日向などで船を仕立てて北上
潮の激しく、風の強い関門海峡を通らずいかに
東海岸から瀬戸内海へは行って行った

2. 柳田国男(やなぎたくにお)

日本民俗学の創始者、思想家

3. どこで日本人は成長してきたか

九州の南部で、ということは真実であるかもしれない。
そこまでくる道筋がよくわからない。

4. 海上の道

危険と不安の多かった一つの島に、もう一度辛苦して家族朋友を誘ってまで、渡ってくることになったのか？

最も簡単に、ただ子安貝の魅力のためにという一言で解説し得るように思っている。

5. 南方の島々と大陸(揚子江南岸)との往来
参加した宮古島への船、子安貝

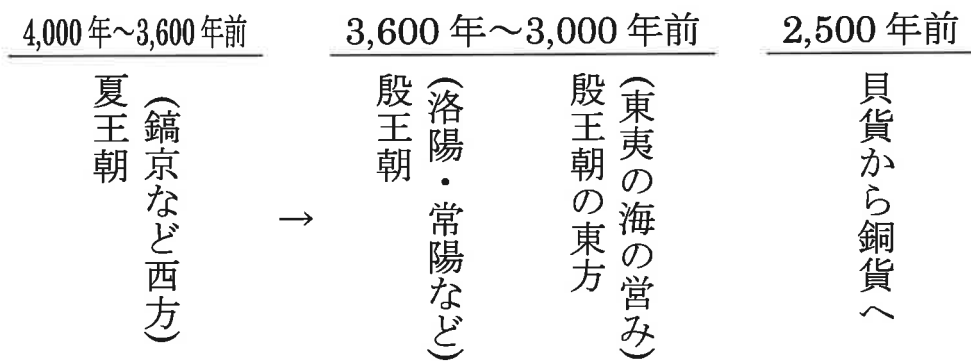
八重干潮(ヤエビシ)
広大な岩礁地域
伊良部島の佐良浜の磯まわり

何故、宮古(琉球列島)か
それは子安貝を採取し、殷王朝へ売るために来た！！

子安貝の需要がなくなったとき(B.C7C~2C)
稲作が宮古の狭い土地から広い土地を求めて北上した(農耕民族の移動)

・・・騎馬民族は朝鮮半島経由

6. 貨幣の移り(貝貨から銅貨)



(史記と徐福)

2022.05.23

1. 「史記」の記述の中にある「徐福」の話は興味深い。
史記の中に「秦の始皇帝」との係わりから、渤海の中の島(蓬萊、方丈、瀛州)を経て、海外(日本、沖繩、台湾)へと広がって行く。
2. 始皇帝は天下統一(前 221 年)の後、全国巡行の旅に出ており、その第 1 回目(前 219 年)と第 2 回目(210 年)に徐福は山東省の「琅邪」において、始皇帝と面談し、3,000 人の童男、童女と莫大な資金を持って海外へ行って戻らなかった。
3. 史記の正確性は定評のあるところであり、始皇帝の求めに応じて、仙薬を求めてという名目で、山東省の港から出航したのは間違いないところである。
4. それを受けて、日本各地の徐福上陸の地と言われるところがあり、特に和歌山県の熊野、新宮市と富士山に定住したとされている。
5. 東シナ海を突っ切って、江南地方から済州島を経由して、日本の九州西海岸へたどり着くルートも考えられる。
6. 日本に「イネ」が伝わったルートと船は後世の「遣唐使船」のように平底船の不安定なものではなく、外用船で東シナ海を突っ切って日本へ到着したのかもしれない。
7. ともしれば「遣唐使船」の不安定さを思い浮かべるが・・・

(徐 福 伝 説)

1. 史記の記録は正確なものであるが、「徐福伝説」というと史記の記録とは全く別の伝説の世界ではあるが、日本全国各地に広がっている。
遺跡等があるものだけでも、青森から鹿児島まで 20 数ヶ所に及んでいる。
2. 佐賀県には、徐福上陸地(浮盃)新北神社、徐福長寿館、金立神社など多くの徐福関係地とされるものがある。
3. 佐賀県の外にも、鹿児島県、宮崎県、三重県熊野市、京都府与謝郡伊根町、愛知県などに徐福上陸地とされるものがある。
ネットで見るとそれぞれに立派な神社や公園が建てられている。
4. ネットの中で、「徐福伝説－邪馬台国」の記事の中で、中国大陸から横に見た日本海と愛知県立大学大学院「達志保先生」の記事は興味深かった。
5. 朝鮮半島と九州の距離を近く、中国南方と九州も済州島を経て九州に近く古来の可能性が予想される。



日本へ脱出した徐福たち (史記の中の冒険家②)

6月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2022年6月11日(土)

「徐福」は約2300年前の人で、伝説上の人物であるとされていた。

しかし、司馬遷が史記に記載しており、実在した人物である。

「徐福一行」は中国封建時代の圧政から逃れるため、計画的に海外に移民し、日本列島各地へたどり着いたと考えられる。

徐福が渡海し、「平原広沢を得、止まりて王となり」(淮南衡山列伝)、そこはアメリカ、中国東南沿海の海人族集団であるとする中国学者の説もある。

しかし、徐福たちが日本列島へ来る1000年前の約3300年前、日本列島へ来た人たちがいた。

殷の時代の「殷墟」からおびたしい「炭化した寶貝(子安貝)」が発見されているが、寶貝は銅銭が使われる前の貨幣であった。これは大陸沿岸にはなく、大陸からたくさんの人が日本海を超えて「鹿児島南部や琉球の宮古島」へ子安貝を採りに来ていたに違いない。

子安貝を採ることは、大きな金儲け(ゴールドラッシュ)であり、冒険心のある人が、危険を超えてやって来たのだろう。

青銅の貨幣が子安貝に取って代わってからも、彼等のある者は日本に定住し、大陸の最新技術、稲作を始めたに違いない。徐福が日本へ来る前に稲作が日本で始まっていたのはこういう事情だと考えられる。

徐福は息もつけないような、厳罰主義の国「秦」から逃げ出したいと思ったに違いない。行くには金が要る。そこで「始皇帝」を「不老長寿の薬」をさがしに行くことだまして、童男、童女三千人とともに出航した。

これは、司馬遷の史記(始皇本紀、淮南衡山伝)に書いてある。

時代は下がるが、三国時代「呉の孫権」が、魏に対抗するために多くの大船を作った。そして「公孫淵」との共同作戦や集民のために一万人もの兵をのせて出兵した。この結果は、8000人位は帰って来なかったという。

日本各地の徐福伝説はこのような歴史的事実によるものもあろう。

日本人の祖先は大陸から来た人たちが主流であると思われる。約12,000年前、大陸から分断されて西太平洋上に日本列島となった。それ以来、最古のアジア大陸からの渡来者に加えて、東シナ海ルート、南洋ルート、朝鮮半島ルート、北方ルートからの渡来者により日本列島の住民は形成されたのであろう。

そして、徐福の時代の前後の渡来者も加わり、現在の日本人の原型が出来たのだろう。

参考：史記(始皇本紀、淮南衡山列伝)、司馬遷史記(徳間書店)

差出人: yamauchi masaki masaki_yamauchi@hotmail.com

件名: 徐福到日本列岛 2022、6、11 (2) 史记的冒险家

日付: 2022/05/28 17:11:10

宛先: masaki_yamauchi@hotmail.com

据说徐福是大约2300年前的传说中的人物。

但是，司马迁在史记中记载徐福的行动，

所以实际存在的人。

“徐福一行”逃亡从中国封建时代的压政，

有计划的海外移民，到达日本列岛等各地。

有的中国学家说，《淮南衡山列传》

徐福渡海，“得到平原广泽在这里成王”，那里是美国。

“他们是中国东南沿海的海人组集团”

但是，距今3000年前，徐福来到1000年以前，

有的人从大陆来到日本列岛。

在殷代的“殷墟”中，发现了大量的“炭化宝贝（子安贝）”。

“宝贝”是铜钱以前的货币。

宝贝没有在大陆沿海，相当的人越过日本海出海采集宝贝。

从大陆来到日本南部，发生很多宝贝的“日本鹿儿岛南部”、

“琉球宫古岛”等地。

采集“宝贝”是很大的“赚钱”（一种黄金热）。

比较多的大陆人来到“宝岛”，冒着多次生死的危险。

青铜货币替代宝贝以后，他们的子孙有的住在日本，

使用大陆的最新技术在日本开始“种稻子”等活动。

这种事情，徐福来到日本以前，在日本已经开始种稻子。

徐福一定逃亡从“严厉惩罚”的秦国。

需要逃亡的资金，为此欺骗说对秦始皇，

带着3000人的童男童女，出航到大海寻找“长生不老的妙药”。

这些在司马迁的史记中。

迁移在三国时代，吴国孙权建造很多大船。

他为了对抗“魏国”和“公孙渊共同作战”，而且吴国集民，

大约一万军队开船出兵，结果没有回国的8000人。
日本各地的有关徐福的传说，也许加上这样的事情。

日本人的祖先一定从大陆来的人主流。
大约12000年前，从亚洲大陆分割了，在西太平洋上成为日本列岛。
从那以来，亚洲大陆度来的人种，加上黄海、南洋群岛、
朝鲜半岛、北方诸岛、徐福时代前后的渡来者等组成日本人的原型。

iPadから送信



文化

いつの世もこの国でも、人間が長寿を望む気持ちに変わりはない。秦の始皇帝が不老不死を切望したために生まれたという「徐福伝説」の広がりには、そんな人々の思いを、如実に伝えている。私は、この伝説について研究を続けてきた。

約二千三百年前、中国・秦の時代、神仙の術を持った徐福は始皇帝から、不死の薬を探す命を受けた。権勢をほしいままにする始皇帝が、最後に望んだのは長寿であった。その執念は、当時未開の地と言われていた東方にも目を向けさせた。

は後に日本へたどり着き、農耕文化や製紙などをもたらしたと伝えられる。河内遷の「史記」では徐福の出發を紀元前一九年と記している。

この徐福渡来伝説が伝わるのは、青森から鹿児島まで二十数カ所に及ぶ。中国では徐福の故郷が一九八二年に確認されて以来、存在は事実として、国をあげて盛んに研究が行われている。これに対し日本では考古学上の発見などはなく、三十年以上も前から、それぞれの地域で郷土史家らが伝承を推し進めてきた。

徐福伝説のある各地を訪れるうちに、さまざまな伝説、伝説を取り囲む多くの人と出会った。佐賀市金立町では徐福への感謝の気持ちから、農耕善悪医薬の神として神社

にまつられている。和歌山県新宮市では、徐福の巖が公園の中にあり、人々に「徐福さん」と呼ばれ親しまれている。

徐福が探していた不死の薬も、三重県熊野市では薬草の天鳥烏(三)葉八丈島ではアンタバ、佐賀県各地ではクロフキなど各地に自生する特徴的な植物である。

臨終で地元で謝意伝説の伝わり方が興味深く、調べて調査している地域が二カ所ある。一つは、毎年一月二十日に徐福の祭り「童男山ふす

の薬も、三重県熊野市では薬草の天鳥烏(三)葉八丈島ではアンタバ、佐賀県各地ではクロフキなど各地に自生する特徴的な植物である。

徐福は不死の薬は得られなかったが、土地の人々の親切に感謝し「私が求めていたのはこれだ」と言ってお息を引き取る。祭りでは童男山古墳で集めた落ち葉を火にくべ、小学六年生が徐福伝説の紙芝居を上演する。

地域の伝説が、小学校を伝承の場として継承されることになるに、この伝説の生命力を感じる。

日本の徐福伝説 永遠の命

◇始皇帝の使者、不老不死求め各地に様々な顔◇



青森県小泊村にある徐福像

もつ一つは熊野市波田町だ。今もなお人々が「徐福さま」と語るこの土地では、徐福は祭神である。もともと「秦住」と言いたと伝わるこの地では、中国人らしい顔、を意味する「波田須領」という言葉も残っている。

徐福の愛答をテーマにした卒論は、「徐福伝説」を考へて出版もされた。



(つじ)しほ 愛知県立女子大学大学院

本が出る。伝説の伝わる土地から様々な反応があった。徐福を取り巻く人々の姿に別の魅力を感じた。九九年から再び大学院で研究を始めた。

韓国でも研究熱。研究の熱は日中だけでなく、韓国にも及んでいる。徐福が渡来したという伝説がある濟州島で昨年四月、濟州島学会が初めて徐福をテーマにした国際学術大会を開き、日本からの四人の一人として出席した。徐福を東洋シブ共道(シブ)の素材として毎年大会を開くことが決まった。北京でも昨年六月、中国徐福会主催の徐福国際学術検討会が十年ぶりに開かれた。中国で徐福は、日本に文明をもたらした歴史上の英雄として取り上げられている。

徐福伝説については、はっきりしたことは何もお分かっていない。だからこそ、各地の伝説に沿った多様な顔があり、それが地域の中で生き続けている。人々に夢を与え、豊かな伝説の世界を、これからも掘り起して、

志保

淨、施于後嗣。化及無窮、遵奉遺詔、

成山を窮め、之罘に登り、石を立てて秦の徳を頌して去る。

永承重戒。

南して琅邪に登り、大いにこれを楽しんで、留まること三月。す

於是乃並勃海以東、過黃・腫、窮

なわち黔首三万戸を琅邪台の下に徙し、復すること十二歳、琅邪台

成山、登之罘、立石頌秦徳焉而去。

を作り、石を立てて刻み、秦の徳を頌し、得意を明らかにす。

南登琅邪、大樂之、留三月。乃徙

(秦始皇本紀)

黔首三萬戸琅邪臺下、復十二歳、作

琅邪臺、立石刻、頌秦徳、明得意。

海中に神山あり

琅邪台に石碑を立てたとき、齊の人徐市らが上書した。

「東海の果てに三つの神山があり、その名を蓬萊・方丈・瀛州といひ、仙人たちが住んでおります。わた

くしどもは齋戒沐浴し、無垢の童男童女とともに、この神山を探し求めたく存じます」

始皇はこれを聴許し、徐市に童男童女数千人を徴用させ、仙人を求めて海に漕ぎ出させた。

帰途についた始皇は、彭城に立ち寄り、周が滅びたとき沈められたと伝えられる九鼎を泗水から引き揚げようとした。みずから齋戒して祈りを捧げたあと、千人を動員して水中にもぐらせたが、結局、鼎は見つからなかった。そこで、さらに西南へと足をのばし、淮水を渡り、衡山・南郡に行き、長江を舟で渡り、湘山の湘君祠に至った。このとき烈風が襲来し、舟がほとんど進めなくなった。始皇は博士に下問した。

「湘君とは、いったいどういう神なのか」

「堯の娘で舜の妻となった方で、ここに葬られたもの、と申し伝えております」

始皇は怒り心頭に発して、徒刑囚三千人を集め、湘山の樹を一本残らず伐りはらって、山を赤はだかにした。こうして、南郡を出発し武関を経て咸陽に帰った。

〈周の九鼎〉 禹が九州の銅を集めて铸たといわれる鼎で、九つの鼎だとも九という名の鼎だともいわれる。夏・殷・周と受けつがれて天子の位の象徴とされていた。

既已、齊人徐市等上書、言海中有

三神山、名曰蓬萊・方丈・瀛洲、僊

人居之、請得齋戒、與童男女求之。

於是遣徐市發童男女數千人、入海求

僊人。

始皇還、過彭城、齋戒禱祠、欲出

周鼎泗水。使千人沒水求之、弗得。

乃西南渡淮水、之衡山・南郡、浮江、

至湘山祠。逢大風、幾不得渡。上問

博士曰、湘君何神、博士對曰、聞之、

堯女、舜之妻、而葬此。於是始皇大

怒、使刑徒三千人皆伐湘山樹、赭其

山。上自南郡由武關歸。

すでに已るに、齊人徐市ら上書し、「海中に三神山あり、名を蓬

萊・方丈・瀛洲という、僊人これに居る、請う、齋戒し、童男女と

これを求めん」と言う。ここにおいて徐市をして童男女数千人を發

し、海に入りて僊人を求めしむ。

始皇還るに、彭城に過ぎり、齋戒禱祠して、周鼎を泗水より出だ

さんと欲す。千人をして水に没してこれを求めしむるも、得ず。す

なわち西南して淮水を渡り、衡山・南郡に之き、江に浮かび、湘山

祠に至る。大風に逢い、ほとんど渡るを得ず。上、博士に問いて曰

く、「湘君は何の神ぞ」。博士對えて曰く、「これを聞く、堯の女、

舜の妻にして、ここに葬ると」。ここにおいて始皇大いに怒り、刑

徒三千人をしてみな湘山の樹を伐らしめ、その山を赭くす。上、南

郡より武関によりて帰る。

(秦始皇本紀)